

プレスリリース/クロビス=ニコラス/ナインストーリーズ  
Press Release/Clovis Nicolas/Nine Stories

たとえるなら、ついに巡り会えた一冊の本。ひとつ、ひとつの作品が物語の章のように、あるいはショートストーリーのように、それぞれ独特の語り口で私たちを魅了する。夢中になって、すべてのピースを食るように読み終えた時、私たちは自身が作者の世界にすっかり飲み込まれてしまっている事に気付く。

ベーシストであり作曲家でもある **Clovis Nicolas** クロビス=ニコラスは彼のリーダーとして初のアルバム、1曲ずつ異なるアプローチとスタイルで作られ、アレンジをした9つの作品集を『**Nine Stories**』と名付けた。それぞれがタイトル曲となってもおかしくないほど聞きごたえのある9トラックが収められた、このアルバムを聞く時、彼のオリジナルな音楽的ビジョン、クラシック音楽とモダンジャズが融合し昇華した世界がはっきりと観えてくる。

南フランス、プロヴァンスで育ったクロビスはエクサン=プロヴァンス大学で哲学を専攻し卒業するが幼い頃から持ち続けてきたベースプレイヤーとしてプロのミュージシャンに成る夢を捨てきれず、その道で生きてゆく事を決意。その後瞬く間にパリで活躍するようになり **Andre Ceccarelli** アンドレ=セッカレリ、**Stephane Belmonbo** ステファン=ベルモンボ、**Baptiste Trotignon** バティス=トロティニオン等 多種多様な有名ミュージシャンらと共演し、ファーストコールミュージシャンとしてその名を知られるようになる。

2002年にNYに移った後はさらに活動の場を拓き、ギタリストの **Peter Bernstein** ピーター=バーンステインやサクソフーンの **Harry Allen** ハリー=アレン、**Grant Stewart** グラント=スチュワートを筆頭により多くのミュージシャンらと共演し、ジャズの本場NYでも頭角を現す。2009年、さらなる飛躍を求め、名門ジュリアードのジャズ科に難関を突破し入学した後は巨匠 **Ron Carter** ロン=カーターや **Ben Wolfe** ベン=ウォルフのもとで切磋琢磨する傍ら、クラシック作曲家でもある **Dr. Kendall Briggs** ケンデール=ブリッグス博士より対位法、管弦楽法、管弦楽編曲法を学び、2012年、異例の早さで修士号を獲得し卒業する。ジュリアードでクロビスが得たものは音楽の専門的知識や技術だけではなく、彼はまた、世界でもトップレベルの若きミュージシャンらと親交を深め、それがこの後彼自身のバンド活動を本格化するきっかけの1つとなる。

それまでクロビスはベーシストとして数多のリーダーのもと何百のミュージシャンらと様々なスタイルで共演してきた。満を期した自身のためのレコーディングではそれらの経験をふまえて、彼はさりげないかたちでリーダーシップを取る事を選んだ。ベーシストとしてソロプレイを中心にしながら全面的にでも、背後から、作曲、編成やアレンジを通して、自分だけでなくバンド全体を前に押し進めることに力を費やした。

クロビスはこのアルバムで彼の卓越した6人編成のバンドのために5曲を書き下ろし、スタンダードジャズ4曲をアレンジした。このセクステット、6人編成という構成はクロビスの密度の濃い曲作りに柔軟性を与えるのに最適なものとなった。

また本来は第三の金管楽器のパートなるところをあえてギターにしたことでアルバム全体のサウンドに軽やかさが感じられる事となった。

クロビスの厳選されたバンドメンバー、近い将来必ずや目にする事になるであろう、若きミュージシャン達は国際色も豊かだ。トランペットにインド系の父を持つシアトル出身のライリー＝ムリヤカー、サククスにはスイス出身のルカ＝ストール、日本からはピアノの海野雅威、ドラマーのジミー＝マックブライト、ギターのアレックス＝ウィンツはともにアメリカ、イーストコーストで育った。ライリー、ジミー、アレックスはクロビスのジュリアード同窓生仲間でもある。

レコーディングはこのエネルギッシュなバンドのオープニングにふさわしい鮮烈なシングチューン、“Pisces”で幕を開ける。Kenny Dorham ケニー＝ドーハムの“None Shall Wonder”ではギターのアレックスの骨太でブルージーなサウンドと押さえながらも張りつめた他のメンバーのプレイのからみがこの曲の訴えるような物悲しさをきわだたせる。“Juggling”はタイトルのおおりのサーカスでジャグリングを見ているような、(はらはら落ち着かない、でも目を離せない)リズムの使いの見事なチューン。3/4拍子と4/4拍子が交錯する中で厳格なクラシックの対位法にもとづいたメロディーがベース/サククス/ギターによって奏でられる、といったクセになりそうな曲。

“Mother and Father”はもともとビッグバンドのためにかかれたチューン。デューク＝エリントンに代表される古き良きアメリカのジャズエイジを愛するすべての人に捧げられた曲。シンプルなメロディーに重なる複雑なハーモニーにトランペットとピアノのソロが美しい。

ウイットに富んだコンテンポラリーソング、“Thon’s Tea”はグルービーかつ情熱的。それに続くのがこのバンドの目玉の曲ともいえるソニーロリンズの“The Bridge”。ソニーロリンズがマンハッタンとブルックリンにかかる橋の一つ、ウィリアムズバーグブリッジの下でひらめき作ったといわれるこの曲にふさわしく、マンハッタンのど真ん中に立っているような喧噪をおもわせる、しかし緻密に練られた音の混沌ではじまり、しだいにそれが巨大なエネルギーのうねりとなり拡大していく様は見事。続く各メンバーの息をのむソロプレイも聞き逃さない。伝説的トランペッター、Tom Harrell トム＝ハレルに捧げられたこの曲、“Tom’s Number”は二つの独立したメロディーが同時に複合的ハーモニーに重なるカラフルなジャズワルツ。

アルバムには2つのジャズスタンダードのアレンジ曲が収められている。“You and the Night and the Music”そして“Sweet Lorraine”。

クロビスは前者でジャズの古典的、華麗なアプローチとベースソロを聴かせる一方、  
後者ではすべての余分をはぎとった、ベースとギターだけの剥き出しのセッティングでシンプルに心に響くプレイを聴かせ、甘い余韻を残しつつ ひっそりと静かにこのアルバムの幕を閉じる。

**Clovis Nicolas** クロビス=ニコラスはずっとこのような物語を書きたかったのではないだろうか。彼の初のリーダーアルバム”**Nine Stories**”は音で綴られた珠玉の物語のコレクションだ。その物語たちは極めて変化に富み、独創的であり、強く、美しい。それらがユニークで完璧な登場人物たち=クロビスとそのバンドメンバーたちによって語られる。これらの音物語を覚醒したリスナーが聴く時 そこにはさらなる想像の火花が吹き出し、閃光を発し、きらきらと輝くことであろう。

プレスリリース  
クロビス=ニコラス  
**Clovis Nicolas**  
”**Nine Stories**”  
Sunnyside SSC 1375  
Distributed by King Records

[www.clovisnicolas.com](http://www.clovisnicolas.com)